メルランの最後の日々

花　田　文　男

ローグル国Logresの王であるユテルパンドラゴンUterpandragonは王位を継ぐ男子を残さずに死んでしまったかに思えた。彼の死後，後継者をめぐって諸侯の間に争論が起こる。メルランの助言により，後継者は神意によって決定されることになる。キリスト降誕祭の前日，教会の前の広場に剣を突き立てた巨石が突如出現する。この剣を石から引き抜く者が王となるであろう。折しも通りかかった十六歳のアーサーは，誰が試みても成功しなかったこの剣を苦もなく石から引き抜く。アーサーの若さと家柄の低さのためにいくつかの曲折はあったものの，神の意志は如何ともしがたく結局はアーサーは王に選出され，王として聖別される。

ロベール・ド・ボロンの作とされる散文『メルラン』(1)の最終の場面はここで一応終っている。それとは語られていないが，神意といいながらもこの石と剣はメルランの魔法によって現出したもののようである。メルランは，アーサーがユテルパンドラゴンの子であり，正統な王位継承者であることを知っている唯一の証人なのだが，諸侯を納得させるためにこのような手の込んだ演出を必要としたのかもしれない。

アーサーの誕生に関わり，ついには彼を王位に就けたメルランには，この後さまざまな可能性が残されていた。

メルランをまとまった形で初めて書き記した『ブリタニア王史』(2)では，メルランはパンドラゴンとコーンウォール公イジェルヌの密会を仲介してアーサーを懐妊

(1) Robert de Boron, *Merlin*, éd. Alexandre Micha, Paris/Genève, Droz (TLF), 1980.

(2) Geoffroi de Monmouth, *Historia regum Britanniae*, éd. Edmond Faral, dans *La légende arthurienne, études et documents*, Paris, Champion, 1929, 3 vol., tome III.

させる。この後，メルランは回想の中で名が挙げられるだけである。この書ではアーサーは初めから正統な王位継承者と認められており，大陸征服，ローマ人との戦いもアーサー王が自らの功業によって勝ち取る。もはやメルランの力を借りる必要はなかった。歴史書とされる『ブリタニア王史』では，得体の知れない予言者，魔術師メルランが活躍する場は多くは与えられなかったようである。メルランはサクソン人の敗北とブリトン人の勝利を告げる「ヴォルティジエの予言者」vates Vortegirni(3)であって，「アーサーの予言者」とはならなかった。いずれにしてもメルランはこのように歴史の表舞台から黙って退場することもできた。

あるいはロベール・ド・ボロンの三部作のうち，先に上げた『メルラン』の次に来るいわゆる『ディド・ペルスヴァル』(4)では，メルランの最後は次のように語られる。

ローマ進攻を三日後に控えてパリにいるアーサー王に，留守をあずけた甥のモルドレの裏切りが知らされる。急ぎブリテン島に引き返したアーサー王は，戦いの中で致命傷を負い，モルガンによってアヴァロンAvalonに運ばれる。知らせを聞いたメルランは小さな館を建てて隠棲する。これによれば，メルランは最後までアーサー王の時代を見とどけ，その後も隠棲したとはいえ生き永らえたことになる。

これから以下に述べようとするのは，上の二つのいずれとも異なったメルランの最後である。メルランは美少女のとりことなって，最後には自らが教えた魔法によって幽閉されてしまう。「魔法にかけられた魔法使い」あるいは「閉じ込められた悪魔」(5)の物語である。「女にだまされた賢者」の物語とも読める。取り上げるのは三つの作品であるが，いずれも内容は類似している。年代的にも古く，物語の原型となったと思われる作品に語られるメルランの最後からまず始めたい(6)。

---

(3) *Ibid.*, § 128.

(4) *Didot-Perceval*, éd. William Roach, according to the manuscripts of Modena and Paris, Philadelphie, University of Pennsylvania Press, 1941.

(5) Cf. Philippe Menard, 《Le diable emprisonné au Moyen Age; réflexion sur un motif de conte》, dans 《*Ce est li fruis selonc la letre*》. *Mélanges offerts à Charles Méla*, Paris, Champion, 2002, pp. 405 – 424. ただしメルランの幽閉がこの話型に属するかどうかについてはメナールは否定的である。

(6) *Lancelot*, Roman en prose du XIIIe siècle, éd. Alexandre Micha, Paris/Genève, Droz (TLF), 9 vol., 1978 – 1983.

*

アーサー王の戴冠後すでに月日もたち，アーサー王の宮廷が盛時を迎えようとした頃のことである。物語の冒頭でこの作品の主人公ランスロとその養い親，守護者である湖水の貴婦人la dame du Lac（la demoiselle du Lacとも）が出会う場面がある。ブルターニュとゴールに境を接するブノイックBenoÿcの王で，ランスロの父バンBanは隣国の王クローダスClaudasに攻め込まれる。残されたトレーブTrebeの城も包囲され，苦戦を強いられている。バンは妻とまだゆりかごにいる幼子ランスロを伴ってアーサー王の元に救援を求めに行く。未明に出発して，夜の明ける頃，高い丘のふもとにある広い湖のほとりに一行は到着した。バンが丘に登って見ると，すべての希望のみなもとであったトレーブの城は家令の裏切りにあって炎上している。落城の悲哀と妻子の行く末への悲嘆のあまりバンは失神して馬から落ち，そのまま死を迎える。夫の帰りの遅いのを気遣って様子を見に丘に登った妻は，この有様を見て悲しみにくれるばかりである。

ふと我に返った妻のエレーヌは湖のほとりに残してきた我が子が気がかりになって戻る。「湖のほとりにいた馬に近づくと彼女は息子が紐を解かれてゆりかごの外に出されているのを見る。一人の乙女が裸の赤児を胸に抱きしめて，目といわず口といわずあきもせず口づけしている。それも無理はなかった。この世でもっとも美しい子供であったから」(7)。父を失った子を返すようにエレーヌは哀願するが，「夫人の頼みに乙女は何も答えない。乙女は腕に子をかかえて無情にも湖の方に歩み，足をそろえて水の中に飛び込む」(8)。子供が湖の中に消えて行くのを見て夫人は気を失う。気が付いたときには，子供と乙女の姿は見えなかった(9)。

突如現われて一方的にランスロを奪い湖に消えた乙女については，後に本文に説明がある。そのくだりは後にして，まずこの湖についての作者の解説を読んでみる

(7) *Ibid.*, tome VII, IIIa, 7.

(8) *Ibid.*, IIIa, 8.

(9) なぜ乙女がランスロを奪うのかは分らない。今は失われた神話的理由があったのかもしれない。Cf. Ferdinand Lot, *Etude sur le Lancelot en prose*, Paris, Champion, 1954, p. 169.

ことにする。湖と乙女には深いつながりがある。

本文の記すところによれば，「この湖は異教徒の時代から〈ディアヌの湖〉li lais Dyanesと呼ばれていた。ディアヌはシチリアの女王で，良き作家ウェルギリウスの時代に君臨していた。当時の信仰なき愚民は彼女を女神と考えていた。彼女は何よりも森の楽しみを愛する女で，一日中狩りに出かけ，そのため信仰なき者は彼女を森の女神と呼んでいた」(10)。古代ローマの女神ディアヌの一部的外れの注釈まで付されているが，中世フランスではディアヌは異教の名残りの森や泉の女神，ニンフと同一視されることが多かった。乙女とディアヌの関係は後の物語にも引き継がれ，両者の結びつきはますます深まって行く。その端緒がすでにここに認められる。

子を連れ去られたランスロの母親のその後を語った後，話は乙女に戻る。「さて物語の語るところによると，ランスロを湖に連れ去った乙女は妖精であった」(11)とあって，乙女の正体が明かされる。そしてようやく本論の主題であるメルランが登場する。「物語が語るこの乙女は，彼女が知る魔術nigremancheのすべてについてメルランから学んだ。しかも大いなる狡知voisdieをもって学んだ」(12)。一体どのようにして乙女はメルランから魔術を知ったのか。ここからメルランと乙女の出会い，メルランの幽閉にいたる回顧譚が始まる(13)。

ブルターニュの国にニニエンヌ(14)という名の大変美しい乙女がいた。この乙女をメルランは愛するようになる。しかし彼女は賢く貞淑であったので，彼に対して

---

(10) *Lancelot, op. cit.*, Ia, 18.

(11) *Ibid.*, VIa, 1.「彼に指輪を与え，幼年時代に彼を育てたこの婦人は妖精であった」(CHRETIEN DE TROYES, *Le Chevalier de la Charrete*, éd. Mario ROQUES, Paris, Champion (CFMA), 1958, vv. 2345－2347) に呼応するものか。ただし同じ婦人がメルランから魔法を学んだかどうかについてはクレチアン・ド・トロワは何も言及していない。ランスロには妖精の保護者がついていたことは12世紀からの伝統であった。人並すぐれた英雄に守護者がついて彼を助け，未来を祝福することは稀なことではない。

(12) *Lancelot, op. cit.*, Ia, 18.

(13) *Ibid.*, VIa, 8－10.

(14) Ninienne. 女主人公の名は写本によってまちまちであり，同じ写本でもいくつかのヴァリアントがある。ここではそれぞれの写本の代表的表記を取った。女主人公の名については次を参照。Jean MARKALE, *Merlin l'Enchanteur ou l'éternelle quête magique*, Paris, Retz, 1981, pp. 89－96; Philippe WALTER, *Merlin ou le savoir du monde*, Paris, Imago, 2000, pp. 173－185.

堅く身を守る。彼が誰であるかを知ると，彼の知識の一部を教えてくれるならば，彼の望むすべてを叶えようと彼女は言う。彼は同意した。乙女が知りたいと望んだのは二つのことである。一つは呪文の力によってある場所に人を閉じ込めること，二つ目は人をいつまでも眠らせることであった。どうしてそのようなことを知りたいのかと問うメルランに彼女は答える。父が二人の関係を知ればたちまち彼女を殺すから，父を眠らせてしまえば安心であると。そしてさらに，嘘いつわりを教えるならば，愛を得られないと付け加えることも忘れない。メルランは二つの術を教え，彼女はそれを羊皮紙に書き留める。こうしてメルランが訪れるたびに，たちまち彼は眠り込んでしまう破目になった。その上彼女はまじないの二つの呪文を股の付け根に書き入れる。その呪文がある限り彼女と寝たと信じ込まされるだけで，実は誰も彼女の処女を奪うことはできない。こうして彼女は望むことを手に入れ，メルランも欲するものを得たと信じていた。メルランから多くのことを知ると，最後に彼女はメルランをだましてダルナントの危難の森la perilleuse forest de Darnantesにある岩屋に閉じ込めてしまう。それ以来誰も彼の行方を知らず，彼の姿を見てその消息を伝える者はなかった。「メルランを眠らせ閉じ込めたのは，ランスロを湖の中に連れ去ったこの乙女であった」(15)と最後に改めて確認され，話は湖水の貴婦人に育てられるランスロの幼年時代に続く。

この短い挿話，回顧の物語にすでに後の作品の枠組は与えられている。発端となるメルランと湖水の貴婦人の出会いから始まり，魔法の伝授を経て，メルランの幽閉によって終る。この図式に沿って後に見る別の物語も進む。しかし二人の性格づけ，他の挿話との関連，叙述の仕方が多少なりとも異なるのも事実である。湖水の貴婦人とディアヌの関係も見逃せない。貴婦人の性格を知る上で一定の役割を果すかもしれないからである。ただし『ランスロ』では湖を媒介として乙女と女神が結びつけられているだけで，物語の中での有機的関連にまで十分に筆が及んでいるとは言いがたい。「彼女は彼に対し堅く身を守った。彼女は賢く貞淑であったから……」(16)というところに，ディアヌの男を遠ざけ処女を尊ぶ女神の面影を乙女の内にわずかに見ることができるだけである。

---

(15) *Lancelot, op. cit.*, VIa, 11.

(16) *Ibid.*, VIa, 8.

メルランはどのようにして乙女を愛するようになったのか。メルランと乙女の出会いは，昔々あるところに式の話で，物語の発端としては唐突で物足りない。またメルランが乙女の意図を知っていて魔法を教えたのか，あるいはメルランは自らの運命をあらかじめ知っていたのかも気にかかるところである。悪魔の子であるメルランが何も知らずに無邪気に乙女の魅力の前に拝跪したとは考えにくい。

さてもう一度本文に戻ると，乙女の消えた湖（「ディアヌの湖」と同一と思われるのだが）についての作者の注釈が付け加えられている。「ランスロをさらい，彼を抱いて飛び込んだ湖は魔法以外のものではなかった」(17)のである。「とても広く深い湖と見えた所に，貴婦人は美しく豪華な館を構えていた。その台地の下に魚が多く住む川が流れていた。この住いはうまく隠されており誰にも発見されなかった。というのも湖に見せかけたものがこの住いを覆っており，誰にも見られなかったからである」(18)。湖と見えたものは，実は魔法によって現出した幻にすぎなかった。幻想性を欠いた味気ない解説ではあるが，これも13世紀に通有の合理化の一つの過程である。この種の幻術も実はメルランから学んだものであることは，後の物語ではさらにくわしく語られるであろう。

当初「ランスロを湖に連れ去った乙女は妖精une feeであった」(19)と述べられていた。さらに「この当時は魔法を知る者はすべて妖精と呼ばれていた。またこの当時ブリテンには他のどこの国よりも妖精が多かった。ブリトン人史 Brethes Estoires の書によれば，妖精は言葉と石と草木の力を知っており，その力によって自ら語るように若さと美しさと富を保っていた」(20)のである。妖精と魔法とは切り離すことができない。妖精とは言えメルランからさまざまな術を学んで得たのである。「彼は二つの術を教え，彼女はそれを羊皮紙に書き留めた。文字をよく心得ていたのだ」(21)と，魔法を学ぶ妖精の姿が描かれている。他界から不意に訪れ，人間に富と力を与える。あるいは男を他界に連れ去って永遠の生命を与えるかつての夢のような妖精の姿からはほど遠い。自らの知識と魅力によって成り上った妖精，と言うよ

(17) *Ibid.*, VIa, 12.
(18) *Ibid.*
(19) *Ibid.*, VIa, 1.
(20) *Ibid.*
(21) *Ibid.*, VIa, 10.

りも魔法使い，魔術師に近づいている。

ついでながらメルランのもう一人の女弟子モルガンも同様である。モルガンはかつてメルランの教えを受けるため彼を探し求め，「誰よりも彼女を愛するメルランに親しみ，その後知ることになる魔術と魔法を彼から学び，彼の元に長くとどまった」[22]のである。元来モルガンは『メルラン』での記述によると，「友人たちの助言に従い父王は彼女を教会の学校で学ばせた。彼女はよく学んだので諸芸をきわめ天文学と呼ばれる学科の奥底を知り，日々それを行い，また物理の学も修めた。彼女の得た学識の自在さにより彼女は妖女モルガンMorgain la faeeと呼ばれた」[23]。彼女は学問により魔法を学んだ妖精なのである[24]。

途中省略したが，『ランスロ』の作者は妖精の定義に続けて，メルラン誕生のいきさつを改めて記している。ところがこれがロベール・ド・ボロンの『メルラン』が描くところのものとは少々異なり，加えて細部に違う注釈が付されている。メルランの性格を『ランスロ』の作者がどうとらえようとしていたかという点で興味がある。

まず結論として，「メルランは悪魔自身によって女にはらまれたのは真実である。そのため彼は父なき子と呼ばれた」[25]と述べられる。彼はどのようにして生れたのか。ある所に身分は低いが美しい娘がいた。両親の結婚のすすめに見向きもしない。目に見える男としとねを共にすれば，死ぬか気を失うというのである。姿を見ることなく触れるだけならばたえられる。そこで悪魔が大気の肉体を持って現われ彼女の元に通い，子をはらませる。生れた子はメルランと名付けられる。「なぜなら生れる前から，悪魔が娘にそう命じたからである」[26]。また彼は洗礼を受けていなかった。「彼は父親の性質を受けて狡猾で不誠実であった」[27]。あるいは邪しまな知識perverse scienceによってすべてを知っている。

---

(22) *Ibid.*, tome I, XXIV, 42.

(23) *Merlin, op. cit.*, § 72.

(24) 13世紀における妖精の合理化，妖精から魔法使いへの移行については次を参照。Ferdinand Lot, *op. cit.*, p. 272; Laurence Harf-Lancner, *Les fée au Moyen Age. Morgane et Mélusine. La naissance des fées*, Paris, Champion, 1984, pp. 411－431.

(25) *Lancelot, op. cit.*, VIa, 2.

(26) *Ibid.*, VIa, 7.

(27) *Ibid.*

『メルラン』での誕生譚とは大分異なる話である。そこでは彼は娘の父親の名を取ってメルランと名付けられて，洗礼も受けた。母親の悔悛と告解によって神から未来を知る力も授かっていたはずである。『ランスロ』に語られるメルランは悪魔の領分だけが強調される。かつて悪のために用いられたことのない彼の知識は邪しまな知識におとしめられ，悪魔の子にふさわしく性質も狡猾で不誠実となる。

なぜこのようにメルラン像はおとしめられなくてはならなかったのか。理解できないことではない[28]。それはまず『ランスロ』の主題に関わってくる。言うまでもなく本編の主人公はランスロである。しかもランスロにはクレチアン・ド・トロワ以来からかそれ以前からかあらかじめ彼の養育者，守護者である妖精が控えていた。時代は替ってもはや古い予言者は退場する時が来たのである。聖杯探索の騎士ペルスヴァルがガラアドに取って替られたように，時代は常に新しい英雄を必要とする。かといって，『ブリタニア王史』のように断りもなく黙ってメルランを退場させる訳にはいかない。メルランはアーサー王物語群の中でも赫々たる名声を持つ登場人物なのだから。そこで案出されたのが湖水の貴婦人によるメルラン幽閉の一件ではないのか。元来ランスロの守護者である湖水の貴婦人はメルランとは無関係な人物あるいは妖精であったのだが，メルランを物語中から排除するためににわかに呼び出されたもののようである。メルランを岩屋に閉じ込めるという非道を合理化するためには，あくまでもメルランを狡猾な悪魔の子に仕立て上げる必要が是非ともあった。最良の騎士，王妃グニエーヴルの恋人となるべきランスロの保護者に汚点を印すことは許されない。その上すでに『ランスロ』の続きである『聖杯の探索』にも『アーサー王の死』にもメルランの活躍の場は与えられていなかった[29]。いずれかの時点でメルランは遅かれ早かれ消え去る運命に物語の上ではあったのである。そのための性急な場がメルランのためにしつらえられた[30]。

後代の『メルラン』の続編は同じ図式にのっとりながらも，このエピソードをさ

---

(28) Cf. Richard Trachsler, *Clôtures du cycle arthurien. Etude et textes*, Genève, Droz, 1996, pp. 82 et suiv.

(29) *Ibid.*, p. 93.

(30) James Douglas Bruce (*The Evolution of Arthurian Romance from the Beginnings down to the Year 1300*, Göttingen, 1928, 2 vol., réimpr. Gloucester (Mass.), Peter Smith, 1958, vol. 1, p. 150)によれば，この挿話は後代の挿入である。

らに拡大して行くであろう。

*

次に取り上げるのは『メルラン』と『ランスロ』の間に後から付け加えられた，通常「流布本続編」la Suite-Vulgateと称される作品に織り込まれたメルランの最後である。前にも述べた通り『メルラン』はアーサーの戴冠で終り，『ランスロ』ではアーサー王はすでに王権を確固としたものにしている。アーサーの戴冠から王権を確立するまでの空白を埋める必要から「続編」が企図された(31)。同時に『ランスロ』では過去の物語として回想されたメルランの最後が，ここでは物語の進行に沿ってよりくわしく再話されることになる(32)。

元来「流布本続編」は新たな校訂本の表題『アーサー王の初期の事績』にもある通り(33)，メルランのその後の活動というよりもアーサー王の初期の治世における事績を描いたものである。アーサー王に臣従しようとしない内部の封建領主，大陸とローマから王権を侵そうとする外敵との戦いにつぐ戦いが連続する。他の諸作品とは違いアーサー王は戦いの先頭に立ち敵との一騎討ちも辞さない。メルランも単なる軍師ではなく，時には流旗を手にして戦場を疾駆する。しかしアーサー王とグニエーヴルの結婚，ゴーヴァンを始めとする若い騎士たちの活躍などはあるものの

(31) Alexandre Micha, 《L'Estoire de Merlin》, dans *Grundriss der Romanischen Literaturen des Mittelalters*, vol. IV, *Le Roman jusqu'à la fin du XIIIe siècle*, éd. Jean Frappier et Reinhold R. Grimm, Heidelberg, Carl Winter, 1978, tome 1, p. 593.

(32) Cf. Alexandre Micha, *De la chanson de geste au roman*, Genève, Droz, 1976, pp. 356–357; Fanni Bogdanow, *The Romance of the Grail. A Study of the Structure and Genesis of a Thirteenth-Century Arthurian Prose Romance*, Manchester University Press/New York, Barnes & Noble, 1966, p. 180.

(33) *Les premiers faits du roi Arthur*, texte établi par Irène Freire-Nunes, présenté par Philippe Walter, traduit et annoté par Anne Berthelot et Philippe Walter, dans *Le Livre du Graal* I, édition préparée par Daniel Poirion, publiée sous la direction de Philippe Walter, Paris, Gallimard (Pléiade), 2001. なおnoticeを参照（p. 1803）。ミシャ（A. Micha, *De la chanson de geste au roman, op. cit.*, p. 368），およびロット（F. Lot, *op. cit.*, p. 282）によれば本書は『アーサーの書』*Le Livre d'Arthur*とも称されるべきとされる。

全体として事件の起伏にとぼしく描写も画一的で単調である。「歴史的続編」la suite historiqueとも称される由縁であろう。

したがって文学的な評価も概して芳しいものではない。「興味が全く欠け，幻想性も詩想もない」「活気のない平板さ」という手ひどい評さえ見られる(34)。戦闘の繰り返しは「月並み」でしかなく「文学的価値は大きくはない」ものの，全体としてはいくつかの興味はあると多少の擁護を試みる者もいる(35)。あるいは戦闘場面の繰り返しなどの技法は，近代の読者には単調に映るが，中世の典型的な感性に従ったものにすぎないとする場合もある(36)。

構成という点でも評価はまちまちである。それというのも，中世の散文物語に多用された「絡み合い」entrelacementの技法が介在するからである(37)。一つのエピソードがまとまって語られるのではなく，次々と他のエピソードによって中断される。「メルランとヴィヴィアーヌの話」だけを取り上げてみても，刊本で850頁にわたる『アーサー王の初期の事績』のうち600頁余りにおいて10か所にこの話は散在して語られる。全体との関連でこれが重層的効果，サスペンスを生み出しているか，単に散漫な印象を与えるだけなのか評価は分れる。ある評者は，メルランの挿話が戦闘の繰り返しの単調さを救うものだと言う(38)。ある評者は，アーサー王の戦いの話の中に不自然に挿入されていて全体の統一的部分とすることに失敗していると言う(39)。全体として見れば，繰り返しと単調さが目立つものの，あちこちに散りばめられた「メルランとヴィヴィアーヌ」の挿話だけを抜き出してみるならば，この部分は年代記風な歴史的続編とされる本作品の中でもっとも興趣に富んだ部分であると言えなくはない(40)。

---

(34) Ferdinand Lot, *ibid.*, p. 283.

(35) Alexandre Micha, 《L'Estoire de Merlin》, art. cit., pp. 593－594.

(36) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, notice de Ph. Walter, p. 1812.

(37) Entrelacementについては次を参照。F. Lot, *op. cit.*, pp. 17－28; Eugène Vinaver, *A la recherche d'une poétique médiéval*, Paris, Nizet, 1970, pp. 129－161; A. Micha, *De la chanson de geste au roman, op. cit.*, pp. 373－375（特に『流布本続編』でのentrelacementについて）。

(38) Alexandre Micha, *De la chanson de geste au roman, op. cit.*, p. 370.

(39) Fanni Bogdanow, *op. cit.*, p. 180.

(40) Alexandre Micha, 《L'Estoire de Merlin》, art. cit., p. 595.

その内実がどのようなものであるか，以下に順を追って紹介してみたい。

*

メルランの幽閉への道は，まず彼自身の不吉な予言から始まる。例によって戦いの合い間にノーサンバーランドNorhomberlandのブレーズ師の元におもむいたメルランは，それまでに起きた事柄をブレーズに書き取らせる。そしてこれから宿敵のクローダス以下の連合軍に攻められようとしているブノイックのバン王に急を知らせに行くと言う。キリスト教世界を救ってほしいと懇願するブレーズに，「ところがこの地こそ私はもっとも憎まなくてはならない。というのもこの地には牝狼がいて，鉄でも木でもなく，金銀でもなく錫や鉛でもなく，水と草木をもたらす大地の何物でもない輪によって猛々しい獅子を縛りつける。獅子はきつくいましめられて身動きできないであろう」(41)とメルランは突如答える。さらに「この予言は私に関わる。しかも私には防ぐ手立てがないことはよく分っている」(42)と続ける。狼よりも強いはずの獅子を地上の物質ではない何かあるものによって縛りつける牝狼，これはメルランをいずれ閉じ込めることになるヴィヴィアーヌVivianeを象徴する動物である。この時点ではブレーズには十分に理解できない曖昧な表現ではあったが，すでにメルランは自分の未来を師に告げている。しかもそこから逃れることはできない(43)。予言者は偉大であればあるほど，自らの運命を予言することができる。それも最終の運命である自らの死を。メルランの伝承上の先駆者たちは皆このようにして死んで行った。

ただちにメルランはブルターニュ近くのブノイック王国に向い，バン王の従弟レオンスに警告を発し，方策を指示して去る。「メルランはレオンスと別れるとすぐ大変美しい少女に会いに行った」(44)。彼女はとても若く，ブリオスクBriosqueの

(41) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 249.

(42) *Ibid.*, § 250.

(43) ここでの予言の諸写本の異同，解釈については次を参照。Richard TRACHSLER, *op. cit.*, pp. 84－91.

(44) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 252.

森[45]に接するいとも豪奢な城に住んでいた。この森は狩りをするのに適しており，さまざまな鹿にあふれている。

一体この少女をメルランはどこで知ったのであろうか。テキストは何も語っていない。自らの運命に引き込まれるかのようにメルランはブリオスクの森に向う。しかし少女の方にもメルランを迎える必然があった。そのいわれを少女の父の代からのディアヌとの関係からここで説き起こされる。

「今話した少女は，ディオナスDyonasという名の高い家柄の陪臣の娘であった」[46]。ここで少女の父ディオナスと女神ディアヌの関係，彼が女神から受けた贈物が語られる。「森の女神ディアヌDyane la divesse des boisはたびたび彼の元に語らいに来ては，何日も彼のそばにいた。彼はディアヌの名付け子であった」[47]。これでDyonasというDyaneの男性形を思わせる名の由来も理解できる。なぜディアヌがディオナスの名付け親になったかの理由は明らかにされてはいない。そしてその贈物とは次のようなものであった。彼が最初にもうける女の子はこの世でもっとも賢い男に望まれる。彼は魔術の力によって彼の知識を彼女に教える。しかも彼は一目見た時から彼女にあらがえず，彼女の意思に反して彼女に力をふるうこともできず，彼女の求めるすべての事を彼は教えるだろう，というものであった。ディオナスは神に愛でられた男の一人であったのであろうか。長ずるに及んで彼はブルゴーニュ公の姪を妻に迎え，隣地のバン王と親しみ，クローダスとの戦いにも参戦する。やがて妻から玉のような女の子を得る。洗礼名をヴィヴィアーヌと名付ける。これはカルディア語で noiant ne ferai（私は何もしない）[48]という意味であると注される。彼女が成長し，「メルランがレオンス・ド・パレルヌの元を去った時には十二歳であった」[49]とある。

ヴィヴィアーヌの出自を語るために，彼女の父の代からのディアヌとの因縁が説

---

(45) ブリオスクの森の位置については次を参照。Ph. WALTER, *Merlin ou le savoir du monde, op. cit.*, pp. 173 et suiv.; *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, note au § 366 (p. 1865).

(46) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 253.

(47) *Ibid.*

(48) *Ibid.*, § 255.

(49) *Ibid.*

かれる。ヴィヴィアーヌは生れる前からこの世でもっとも賢い男に望まれるという贈物を与えられていた。メルランが自らの運命を予見しているように，ヴィヴィアーヌの運命も定められている。話は振り出しに戻っていよいよメルランは，まだ十二歳の幼いと言ってよいヴィヴィアーヌに会いに行く。

メルランは美しい若者の姿を取ってブリオスクの森へ来た。泉は清らかに透き通り，砂石は銀のようにキラキラしかった。「ヴィヴィアーヌはこの泉にしばしば遊びたわむれに来ていた。メルランが訪ねたまさしくこの日にも彼女はここに来ていた」(50)。十二歳の少女と若者に変身したメルランの泉のほとりでの出会い。一人の騎士が水辺のほとりにたわむれる妖精を見い出す妖精譚の定型を踏んでいるかのようである。妖精は不意をおそわれた風でありながら，前から騎士の現われるのを待ち設けているのだ。メルランは泉に来て彼女を見い出すと，声を掛ける前に彼女をじっと見入った。「一人の少女に逸楽を得て，自らを汚し神を忘れるまでに理性と知恵を失って過ちに落ち入るのは愚かなことであろう」(51)と心の内でつぶやく。とつおいつ思いあぐねた末に，やはり彼女に挨拶した。メルランにもさすがに逡巡はあったようだ。しかし定められた運命に抗することはできない。

すべての人の心を知る神のおかげで，メルランが「自分をも他人をも傷つけることのないように，彼女自らが望む善と名誉を彼がなすように」(52)と少女は主の名を借りて賢く挨拶を返す。十二歳の少女とは思えぬ応答である(53)。慎ましさの中に処女の警戒心を潜め，メルランの意中を見透かしているようでもある。相手の思い

(50) *Ibid.*

(51) *Ibid.*

(52) *Ibid.*

(53) もっとも中世文学の中では，日常の子供の姿が描かれることはなかった。子供の言動が注目されるのは，子供らしからぬ大人顔負けの言葉や行為であった。ランスロが十歳の時に従弟のリオネルを慰めるのを聞いて，「この言葉に年長の者たちは驚き，ほんの子供がこれほど賢い言葉を示すのを不思議に思った」(*Lancelot, op. cit.*, XVa, 30) ともある (Cf. Micheline de Combarieu, 《Le Lancelot comme roman d'apprentissage. Enfance, démesure et chevalerie》, dans *Approches du Lancelot en prose*, éd. par Jean Dufournet, Paris, Champion, 1984, pp. 106－107)。そう言えばメルラン自身も生れてすぐに信じられぬ予言をしていたのであった。このことはもちろん少女にも当てはまる。ただし老人の思慮を持った少年puer senexは古典古代からの一つのトポスであった (E. R. クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一他訳，みすず書房，1975年，137－141ページ)。

通りのことを「私は何もしない」という名前通りの密かな宣言でもあろうか。少女の答えを聞くと，メルランは泉の縁に座り「あなたは誰か」(54)とたずねる。そうしてみるとメルランはこの少女が自ら予言した牝狼であるとは確かには知らなかったとも読める。少女にもあなたは誰かと問われて，自分はすばらしい仕事を教えてくれた師を探す放浪の若者であると答える。その仕事とは城を現出させ，池の上を足を濡らさずに歩き，川の流れを思いのままに変えるというものである。「私の生きている限り，裏切りもなく誠実にあなたの友としていつまでもいると約束しますから，あなたのその術を知りたいものです」(55)と少女は切り出す。「あなたの愛が私のものであるという約束で，ただしそれ以上のことは求めない」(56)という約束でメルランは術の一部を見せることにする。少女は天真爛漫で無邪気なのか，あるいはそう装っているのか，メルランは逆に少女の詐術を知っているのか知らぬ振りをしているのか，事態は不分明なままである。

メルランは少女の求めに応じて地上に円を描くと，ブリオスクの森から貴婦人や騎士，乙女や楯持が現われる。楽人も交えて手に手を取って彼らは楽しげに歌い踊る。さらには城を現出させ，城下には美しい庭園がある。少女はこの不思議に驚き，じっと見つめている。彼らの歌っている歌のすべてが分らないのが心残りである。彼女に理解できるのは，「まことに愛は喜びで始まり苦しみで終る」(57)というルフランだけである。

少女の好奇心はいやが上にも高まったであろう。ただし同時に二人はこのルフランの意味するところも知っていたにちがいない。

メルランのやや性急な求めと真の意図を隠したような少女の応対で二人の会話は続く。

「お嬢さん，いかがでしたか」

「いろいろの事をしてくれたので，私のすべてはあなたのものです」

「どうか約束を守ってください」

---

(54) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 256.

(55) *Ibid.*, § 257.

(56) *Ibid.*

(57) *Ibid.*

「もちろん喜んで，でもまだ何も私には教えてくださらない」

「それでは私の術を話しましょう。あなたはそれを文字に書き取るのです。あなたは文字をよく知っておいでですから」

「どうして私が文字を知っていると分るのですか」

「私の師が教えてくれたので，人のするすべてが分るのです」[58]

文字に書き留めるのは『ランスロ』におけるニニエンヌも同様であった。文明化された妖精とでも言おうか，13世紀の妖精の姿，人間的になった妖精がここにはいる。人のするすべてを知る能力をメルランに与えた師maistreが悪魔であることは，ロベール・ド・ボロンの『メルラン』に通じた読者には自明のことである。したがってメルランが探している師もやはり悪魔を指すことになるのであろうか。

やがて魔法が終り，騎士や貴婦人は森の中に姿を消し，城は跡形もない。ただ少女の願いにより庭園だけは「歓楽の園」Repaire par joie et par leece[59]として後に残る。メルランはもはや別れを告げようとするが，まだ彼の術を何も教えてくれないと少女はせがむ。愛の証しを与えてくれるならばと言うメルランに少女はしばらく考え答える。「そうします。私が求めるすべての事を教えてくださり，私がそれを操れるようになった後という条件で」[60]。メルランは承諾し，少女に一つの術を教える。彼女はそれを何度も使ってみる。好む所に大きな流れを現出させるのである。少女はその呪文を言われた通りに羊皮紙に書き留める。晩課までこうしていて[61]，二人は別れを告げる。別れ際にいつ戻るかと問われて，洗礼者ヨハネの祝日の前夜であるとメルランは言い残す。

こうして二人のたった一日の出会いは終った。「そうします」si ferai jeは反語で，実際は彼女の名のカルディア語の解である「私は何もしない」noiant ne ferai[62]と響き合っているのであろう。大きな流れを現出させる術は，後に（と言っても物語の成立はこちらの方が早いとされるのだが）ランスロを湖の中に引き込んで拉致し

---

(58) *Ibid.* § 258.

(59) *Ibid.* § 259.

(60) *Ibid.* § 260.

(61) Cf. *ibid.*, note au § 260. かなりの時間が費やされたはずだが，時間は依然晩課である。ここはすでに魔法の時空なのであろう。

(62) Cf. *ibid.*, § 255.

た際に用いた術につながって行く。

*

ヴィヴィアーヌとの再会を約してメルランは少女と別れ，また戦乱に明け暮れる生活に戻る。この間モルガンがメルランに近づき，彼から魔法を学ぶ話が短く語られる(63)。一日アーサー王の許しを得てノーサンバーランドに隠棲する師のブレーズに会う。例によってブレーズはこの間に起った事柄を語るメルランの言葉を書き留める。話がメルランの愛した少女に及ぶと，ブレーズは心を痛めた。少女がメルランを瞞着しているのではないか，メルランは広大な知識を失うのではないか，とブレーズは恐れる。ブレーズは彼を戒めるが，メルランは答えない(64)。

いくつもの戦闘と冒険，アーサー王とグニエーヴルの婚約などのことがあった後，メルランは彼を待つ恋人s'amieの元に行く。

彼と交わした約束通り洗礼者ヨハネの祝日に少女は彼を待っていた。彼を見ると少女は大変な喜びようで，誰にも気付かれずに自分の部屋に彼を導く。気も狂わんばかりに彼女を愛していたのだから，メルランは求められるままにさまざまなことを教える。相手の愛を見て取ると，男を眠らせる法を教えてくれと少女はせがむ。メルランは相手の意中を知りながら，何のためにそんな事を知りたいのかとたずねる。父のディオナスと母を眠らせ，二人の間を気付かれないようにするため，もし父が気付けば二人は殺されるでしょう，というのが彼女の答えであった。

少女はメルランを歓迎する。「彼女は大変喜んだ」(65)はこの後もメルランに会うたびに繰り返される。人を眠らせる法を知るのも両親を眠らせるためで，『ランスロ』におけるニニエンヌの言い訳と全く同じである。さらに「メルランは彼女の意中をよく知っていた」(66)と述べられている。

彼女はこの願いを何度も繰り返した。ある日のこと，泉のほとりの庭園に行った

(63) *Ibid.*, § 356.
(64) *Ibid.*, § 362.
(65) *Ibid.*, § 418.
(66) *Ibid.*

時，少女は彼を膝の上に乗せたびたび自分の方に引き寄せて人を眠らせる法を教えてくれるように懇願した。意図を知りつつも，彼はとうとう教えた。「わが主，神がこのように欲し給うた」[67]からである。加えて彼は股の付け根に書く三つの呪文を教えた。彼女がそれを身に付けていさえすれば，どんな男も彼女の肉体を所有することはできない。彼女は以後彼が来るたびにこの法を用いた。「このため女は悪魔より巧みだと言われる」[68]。

見え透いた言い訳と知ってはいたものの，メルランは少女に人を眠らせる法を教えてしまった。股の付け根に書く三つの呪文も『ランスロ』と同様である（もっとも『ランスロ』では二つの呪文であったが）。自らの運命を知るメルランではあるが，ここでは運命は神の意思に置き換えられている。神の意思に従うメルランとして，彼の悪魔の子の側面は極力避けられているようである。

こうしてメルランは丸一週間少女と共に過し，アーサー王の滞在するブノイックに帰る。

作者は注して，「メルランが彼女にか他の女にか破廉恥を働いたとは何を読んでも見いだせない」[69]としている。作者はメルランの弁護を試みたのであろうか。しかし同時に，「彼女がメルランを知り，彼がいかにして生れたかを知ると，彼女は彼を非常に恐れた。こうして彼女は彼に対して身を守ることになった」[70]ともある。いつ，どのようにしてメルランの正体を知ったのか，そのいきさつは語っていないし，この後は少女の不安が述べられることはない。第一に処女を守る三つの呪文を知っているのだから，少女に危険はなかったはずなのである。

さてここでメルランはアーサー王の一行と別れて突如ローマのジュール・セザールの元に行くという奇想天外な展開となる。劇中劇とも言うべき，男装して皇帝に仕えるグリザンドールGrisandoleと野性人homme sauvageとして現われるメルランの話が挿入される[71]。しかし破滅へと向うメルランの運命とは特別に関わらないので省略したい。ただここで興味のあるのは，野性人に変身しわざわざグリザンドー

(67) *Ibid.*, § 419.
(68) *Ibid.*
(69) *Ibid.*, § 420.
(70) *Ibid.*
(71) *Ibid.*, §§ 422－454.

ルに捕えられたメルランが皇帝に問われて自らの誕生のいきさつを語る一節である。

メルランの短い説明によれば，町の市場から帰宅する途中の母親がブロセリアンドBroceliandeの森の中で道に迷い，一夜を明かそうとしていると，野性人が現われて彼女と寝た。メルランが生れると，母親は彼に洗礼盤で洗礼を受けさせる。長ずるに及んでメルランは父の性を受けて深い森の中に暮すのである(72)。

この話ではメルランはインクブスの子，悪魔の子ではなく野性人の子とされる。彼はまた立派に洗礼を受けたキリスト教徒である。話が矮小化されてしまったが，作者はメルランから悪魔の痕跡を多少なりとも消し去ろうと努力しているように思える。野性人は悪魔ほど恐ろしいイメージを喚起するものではなかったようである(73)。

メルラン誕生の物語はさておき，ヴィヴィアーヌとのその後の交渉に話を戻さなくてはならない。

アーサー王とグニエーヴルとの結婚，サクソン人との戦いの合い間にメルランは師のブレーズを訪れる。ブレーズはメルランの身の上が心配である。「メルランがある婦人を愛していて，彼女についての予言が前に言われた通りに実現されようとしているのをよく知っている」(74)とブレーズは言う。メルランはブレーズに書簡を書かせる。その一節にはこうある。「この国の冒険の始まりと物語，これによって不思議な獅子が閉じ込められ……」(75)。この一節はブレーズに対して前に行ったメルラン自身の幽閉の予言を繰り返しているようである(76)。ただしこの辺でのテキストは混乱を極め，明確な意味をつかむのは困難なようだ(77)。

メルランの危機がますます切迫し，それに応じてブレーズの不安も大きくなる。

---

(72) *Ibid.*, § 436.

(73) Francis Dubost, *Aspects fantastiques de la littérature narrative médiévale (XIIème-XIIIème siècles). L'Autre, l'Ailleurs, l'Autrefois*, 2 vol., Paris, Champion, 1991, tome II, p. 738. なおさまざまな影響化の下での野性人と悪魔（およびその亜種）の混同，この作品での置き換えについては，同書730－740ページを参照。

(74) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 651.

(75) *Ibid.*, § 652.

(76) Cf. *ibid.*, §§ 248－250.

(77) Richard Trachsler, *op. cit.*, pp. 87－91.

この後もメルランは閑暇を見てか，抑えがたい欲求からか少女と逢う瀬を重ねる。ある時はバン王の従弟レオンスと別れ，恋人のヴィヴィアーヌの元に急ぐ。「彼を見ると，彼女は大変喜んだ。彼女に対する彼の愛はますます大きくなり離れ難くなった。知っていることの多くを彼女に教えた」(78)。またある時はバン王とボオール王に別れを告げて恋人に会いに行く。「彼女は大喜びをしたが，それというのも彼の内に見い出した善良さの故に彼をこよなく愛したからである。また彼も彼女を誰よりも愛した。他の誰にも教えようとしなかった事を彼女には教えたのであるから。一週間彼女の元に滞在して別れた……」(79)。

少女は喜んでメルランを迎え入れる。かつての不安など忘れたかのようである(80)。少女はメルランの恋人であり秘術を伝える愛弟子であった。

またある時は真直ぐにブノイック王国に至り，恋人のヴィヴィアーヌの元にたちまち来た。「彼女は彼に会うのを待ち焦がれていた。知りたいと思っていた彼の術をまだ何も知らなかったから。彼女は出来得る限りの喜びの意を表した」(81)。一つの寝台に寝ることもあったが，「しかし彼の性をよく知っていたので，彼が彼女と寝たいと思った時には，枕に魔法をかけて彼の腕の間に差し入れた。そしてメルランは眠り込んだのだが，メルランが女と肉の交わりをしたかどうかは物語は言い及んでいない」(82)。少女はすでに身を守るための三つの呪文を知っているのだから(83)，魔法の枕は屋上屋を架す感がなくもないが，これはこれで中世には流布したモチーフなのである。

彼女を愛するあまり一度ならず彼の秘密を教えたので，メルランは「自分が狂人だとさえ思った」(84)ほどである。彼女は彼の教えのすべてを書き留める。こうして

---

(78) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 655.

(79) *Ibid.*, § 717.

(80) Cf. *ibid.*, § 420.

(81) *Ibid.*, § 747.

(82) *Ibid.*なお魔法の枕については次を参照。Helaine NEWSTEAD,《Kaherdin and the Enchanted Pillow: an Episode in the Tristan Legend》, PMLA, 65 (1950) pp. 290－312; Gertrude SCHOEPPERLE LOOMIS, ***Tristan and Isolt. A Study of the Sources of the Romance***, 1913, 2 vol, réimpr. New York, Burt Franklin, vol. I, pp. 257－261.

(83) Cf. *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 419.

(84) *Ibid.*, § 747.

長い間彼女と過ごした後，別れを告げ，年の終りに戻ると約束した[85]。

少女がメルランの来訪を喜ぶのは，彼に会ううれしさなのか，彼に魔法を教わる楽しみなのか判然とはしない。いずれも数日か一週間の逢い引きを何度か重ね，年の終りの再会がいよいよ彼の最後となるであろう。

*

その後メルランはローマ皇帝と戦うアーサー王に従って大陸に渡り，戦いに勝利してローグルに帰還する。ブレーズの元に至り，前に会って以来起きた全ての事を話す。「そこから彼はヴィヴィアーヌの元に行くであろう。彼女に約束した期限が近づいているのだから」[86]。その前にメルランは王と王妃に出発の挨拶に行く。二人は別れを惜しみ，早く帰ってくるよう王は頼む。「殿，最後の時です。あなたを神に委ねます」[87]というのがメルランの返事であった。この言葉を聞いて王は驚くが，「メルランはこれ以上何も言わずに泣きながら去って行く」[88]。改めてブレーズの元に滞在し，彼にも「これが最後の時だ」[89]と言い残す。「この後は恋人の元にとどまり，もはや彼女と離れたり，自分の思いのままに行き来する力は持たないであろう」[90]。引き留めるブレーズに答える。「約束したのだから行かなくてはならない。彼女の愛に囚われてしまって，もはや離れることはできないのだ」[91]。

メルランはこれが最後だということをよく自覚していた。知りながらも彼女と別れることはできない。覚悟の上で王と王妃，ブレーズに別れを告げる。

メルランはブレーズと別れると，たちまち恋人の元に来た。彼女は彼に大変な喜

---

(85) メルランとヴィヴィアーヌの周期的な出会いは，日常の世界と妖精の世界の交通が開かれるケルトの祭に由来するかもしれない（*ibid.*, note au § 747）。以前再会を約したのは洗礼者ヨハネの祝日であった（§ 260）。他では日は明言されていない。

(86) *Ibid.*, § 806.

(87) *Ibid.*, § 807.

(88) *Ibid.*

(89) *Ibid.*, § 808.

(90) *Ibid.*

(91) *Ibid.*

びを表わし，彼もまた同じだ。早速彼女は多くの秘密を求め，彼はそれを教えた。「それ以来彼は愚か者folと思われ，今だにそうである」[92]。彼女は彼の言葉をよく覚え，すべてを書き取った。彼女は七芸に通じた女学者clergesseであった。彼女の求めるすべてを彼が教えてしまうと，「彼女はどうすればこの先彼を永遠に自分のものにできるかに思いを廻らした」[93]。そこで彼女はかつてなかったほどにメルランに甘えて，是非とも知りたいことを一つ教えてくださいと言う。メルランは彼女の望んでいる事をよく知っていて，それは何かとたずねる。「塔も壁も鉄もなく，魔法で，私によってでなくては決して出られないように，どうしたら人を閉じ込めることができるのか，お願いですから教えてください」[94]というのが彼女の返事であった。メルランはそれを聞くと溜息を洩らした。彼女はそれに気付くとなぜ溜息をつくのかたずねる。メルランは答える。「あなたの考えていることはよく分っています。私を囚えようとしていることも。私はあなたの愛に囚えられているのですから，どうしてもあなたの望み通りにするしかないのです」[95]。少女はそれを聞くと腕を彼の首に回す。彼女が彼のものなら，彼は彼女のものなのだ。彼女は言う。「あなたも知っての通り，私があなたに抱く大いなる愛が私を追いつめ，あなたをこの腕に抱くために父も母も捨てることになりました。夜も昼も私の思いと希いはあなたの内にあるのです。あなたなくして，私には喜びも幸せもありません。あなたに私のすべての希望を置いてきました。あなたでなくては喜びも望んでいないのです。私があなたを愛しあなたも私を愛するなら，あなたは私の望むことをなし私はあなたの望むことをなすのが正しくはないでしょうか」[96]。このように巧みに，雄弁に少女から口説かれて，メルランは承知しないわけには行かない。望むことは何かと問われて少女は答える。「私の教えてもらいたい事は，私でなくては打ち破ることのできない力のある術によって人を閉じ込めるのに適当な美しい場所を造ることなのです。そこで，あなたさえよければ，私とあなたは喜びと楽しみの中で過

---

(92) *Ibid.*
(93) *Ibid.*
(94) *Ibid.*
(95) *Ibid.*, § 809.
(96) *Ibid.*

すでしょう」[97]。メルランは答える。「ここにあなたのために造りましょう」「あなたにそれを造って欲しくはないのです。私に造り方を教えてください。そうしたら私の思い通りに私が造りましょう」[98]。承知しましたとメルランは答える。そこで彼は話し始め，少女はすべてを書き留める。彼がすべてを話すと少女は大変喜び，かつてなかったほど彼を愛し彼に愛想のいい顔を見せた。「それから二人して長い時を過した」[99]。

とうとうその時がやって来た。ある日二人は手に手を取ってブロセリアンドの森を楽しげに歩いた。花の開いた美しく高いサンザシの茂みを見つけた[100]。彼らは木陰に座り，メルランは少女の膝に頭をあずける。彼女はやさしく愛撫し始め，とうとう彼は眠り込む。彼が眠ったのを知ると，少女はそっと立ち上り，茂みとメルランの周りに被り物で輪を作った。そしてメルランの教えた通りに魔法を始めた。九度輪を作り九度魔法をかけて彼のかたわらに座り[101]，頭を彼の膝の上にもたせかけた。彼が目を覚ますまでそうしている。やがて彼が自分の周りを見回すと，自分がこの世でもっとも美しい塔の中にいて，かつて見た中でもっとも美しい寝台に横たわっているのに気が付いた。そこで少女に話しかける。「お嬢さん，あなたが私と共にいなかったら私をだましたことになります。あなた以外にこの塔を破る力は誰も持たないのですから」[102]。そこで彼女は答えた。「しばしばここに来ましょう。あなたは腕に私を抱き，私はあなたを抱くことでしょう。これからはあなたの好きなようにしてください」[103]。彼女はこの約束をよく守った。彼女が彼と共にいない夜も昼も少なかったのだから。その時以来メルランは恋人が閉じ込めたこの塔（あるいは城とも）から出ることはなかった。しかし彼女の方は欲する時に出た

---

(97) *Ibid.*

(98) *Ibid.*

(99) *Ibid.*, § 810.

(100) 純潔を守る，妖精の出現する場など，サンザシaubépineはさまざまな含意を持つ（*Le livre des superstitions*, éd. Eloïse Mozzani, Paris, Robert Laffont, 1995, s. v. aubépine, pp. 145－147）。

(101) 魔法の力を生み出すものとしてのcircumambulationについては次を参照。Ph. Walter, *Merlin ou le savoir du monde, op. cit.*, p. 184.

(102) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 810.

(103) *Ibid.*

り入ったりしたのであった。

以上がメルランの少女との出会いから幽閉に至るまでの事の顛末である。まとめて抄出すればとりわけ複雑な挿話というわけではないが，話は他の無関係なエピソードによってしばしば中断され，忘れた頃にまた再開される。作品の全体としては「記憶の芸術」と命名されるのにふさわしい特有の構造を持っている。

力ある予言者の定型を踏んでメルランは自らの行く末を予知し，少女もディアヌの授けた贈物によって運命を定められていた。とはいえ二人の恋のゆくたて，自らの愛と引き換えに秘法を手に入れる狡智に物語的興味がないわけではない。彼女のメルランに対する愛には偽りはなかったように読める。もっとも彼女の愛が彼に対してのものなのか，彼の知識に対してなのか判然とはしない。二つは解き離しがたく結び付いていたとするしかなさそうだ。時に少女はメルランの正体を知って恐れることもあるが(104)，身を守る術を当の相手から伝授されていたのだし，他方では彼の善良さdebonaireté(105)故に彼を愛してもいたのである。少女は常に彼を待ち焦がれ，彼に会うたびに大喜びをする。これが少女の媚態であったとは思えない。少女は一方的にメルランをだましたのではない。人を眠らせる法も人を閉じ込める法も，ここでは少女の意図を知りつつメルランは教えたのである。自分が愚かであることは彼も十分に自覚していた。しかし彼女に対する情念は抑制を許さなかった。彼は自らの運命に対する諦念と以後彼女と二人だけで過すひそかな喜びのために，半ば自発的に彼女に自分の運命を預けたかのようである。

彼女はメルランに対する嫌悪から彼を地上から抹殺したのではなく，彼を愛するあまり彼を独占したかったようでもある。泉のほとりで男を待ち受ける乙女，楽しい語らい，最後には男を他界に連れ去り永遠の生命を与える妖精。ここでのメルランの物語は魔法にかけられた魔法使いの要素を除けば，ある種の妖精譚の典型である。ブロセリアンドの森とサンザシの花など道具立てにも事欠かず，一編のおとぎ話を成している。いずれにせよ『ランスロ』での暗い岩屋に閉じ込められたメルランに比べれば，ここでの彼の境涯ははるかに幸せであったと言わなくてはならない。

---

(104) *Ibid.*, § 420.

(105) *Ibid.*, § 717.

もっとも美しい塔，もっとも美しい寝台の中でメルランはたびたび訪れるヴィヴィアーヌを待つのであるから。

ところでメルランが閉じ込められた地上の物質ではない何かによって出来た城とは何であろうか。この後，消えたメルランの探索という後日談が続く。

*

メルランが見えない城に閉じ込められてから，アーサー王は彼の帰りを七週間以上待つが，メルランの行方は杳として分らない。探索をゴーヴァンに頼み，ゴーヴァンは一年と一日で彼を見つけて帰ると約束する。サグルモールSagremor，イヴァンYvainを始めとして多くの騎士も参加する。サグルモール，イヴァンはメルランに関する何らの情報も得られず空しく帰還する。約束の期限も迫ったころ，ゴーヴァンはある婦人にブルターニュでたずね人の消息が得られるであろうと教えられる。この間にわずかな無礼が元で小人に変身させられたゴーヴァンは，絶望しつつブロセリアンドの森を通りかかる。

右手に弱々しい声を聞き，あちこち見回すが，「空気のような煙しか見えず，それを越えて進むことはできない」(106)。ゴーヴァンはその時こう言う声を聞いた。「ゴーヴァン殿，気落ちすることはない。起こるべきことはすべて起こるのだ」(107)。ゴーヴァンは自分の名を呼ぶこの声を聞いて一体誰かと問い返す。「かつては私をよく知っていたのに，取り残された人間はこうもなるものか。賢人が言う格言は真実なのか。去る者は日々に疎しと」(108)という返事が返ってくる。

ゴーヴァンはメルランの声であることに気付き，姿を見せるように頼む。だがメルランを見る者はもはやいない。メルランの恋人を除いては誰もここにたどりつくことはできないし，話しかけることもない。メルランは言う。「私が閉じ込められたこの塔ほど強力なものはこの世にはない。木も鉄も石もなしに，ただ魔法による

(106) *Ibid.*, § 826.
(107) *Ibid.*, § 827.
(108) *Ibid.*

空気によって閉め切られている[109]。この世の終りまで破られることはないのだ。私はここから出られないし，これを造った者を除いては誰も入れない。彼女は好む時に私の元に来るのだ」[110]。この世でもっとも賢い人間である者の意に反してどうしてこんなことになるのか，とゴーヴァンは問うが，「もっとも愚かな人間だ。何が私に起こるかをよく知っていたのだから。私は愚かであったので，私以外の者を愛し，恋人にすべてを教えたのだ。そのため私は閉じ込められ，誰も私を解放できない」[111]という答えが返るばかりだ。二度とメルランに会うことも話すこともない。「さあ，ここから立ち戻り，私に代って王と王妃とすべての臣下に挨拶し，私に起きた事を語りなさい」[112]とメルランに諭され，彼を失ったことを悲しみながらゴーヴァンはそこを立ち去った。

悲しみつつゴーヴァンは海を渡った。メルランが安堵した通り，ある冒険の後に魔法が解けて，小人から元の姿に戻ったゴーヴァンは定められた一年の期日にアーサー王のいるカルドゥユに帰着する。彼はすべての出来事をアーサー王の前で語る。

こうしている間にもバン王は妻からランスロを得る。バン王はクローダスとの戦いに寧日がない。弟のボオールは病いに倒れ，衆寡敵せずバン王にはトレーブの城しか残されていない。妻とランスロを連れて彼はトレーブの城に立てこもる。ここから次の『ランスロ』の物語は始まることになる。

---

(109) 『ランスロ』においてもモルガンは同様のものを現出させた。不実の恋人たちが一度入ったら，二度と出られない「帰らずの谷」le Val sans Retorがそれで，「谷は不思議なものによって閉ざされ，壁は空気によって巧みに作られている。騎士がそこに来ると禁じられることなく入ることができる。しかし中に入るや否や，帰ることも入った場所を見つけることもできない」(*Lancelot, op. cit.*, tome I, XXII, 5)。作者はこの谷にヒントを受けた可能性もある。ただし同様の不思議な場所はケルトの伝承その他に多く存在する（Cf. Paul ZUMTHOR, *Merlin le Prophète*, Lausanne, Payot, 1943, p. 247)。

(110) *Les premiers faits du roi Arthur, op. cit.*, § 828.

(111) *Ibid.*, § 829.

(112) *Ibid.*

*

最後に紹介するのは『メルラン続編』*la Suite du Merlin*である(113)。先の『流布本続編』と同じく，これもロベール・ド・ボロンに帰される散文『メルラン』の続きをなしており，やはり若き君主の王位選出と戴冠後のアーサー王の統治の初めの年月を語っている(114)。ただし年代的には流布本物語群より後で，『メルラン続編』はおそらく1235年以降に作られたとされる(115)。

ここでのメルランと少女の出会い，メルランの幽閉の物語もやはり『流布本続編』と同様に『ランスロ』の短いエピソードを発展させたものである(116)。しかしながら二つの「続編」の間には，構成においても色調においてもかなりのへだたりが認められる。前に述べたように『流布本続編』においてはメルランとヴィヴィアーヌの挿話はアーサー王と配下の騎士が内外の敵との間に繰りひろげる戦いの連続の中にちりばめられた飛び石伝いのような物語であった。しかもこの挿話はアーサー王の運命と深い関わりを持つことはない。それに対して『メルラン続編』は，発端からしてまずアーサー王の宮廷に鹿を追って突如躍り込む狩人の姿をした少女の話から劇的に始まる。ニヴィエンヌNivienne（ここでは少女はこの名を持っている）がメルランの存在を知るきっかけも物語の中に溶け込んで自然である。同じメルランと少女の出会いといっても，『ランスロ』ではメルランは突然ブルターニュのニニエンヌを愛するようになり，しばしば彼女の元を訪ねることになると素気なく語られるだけである。少女を知るにいたるいきさつなどは一切省かれている。『流布本続編』でも事情は等しい。戦闘の始まろうとする時にメルランは突如若者の姿を取ってブリオスクの森に少女に会いに行く。二人は周知の間柄であったのであろうか。少女は十二歳であったとあるからには，それも少し考えにくい。先行する作品を踏襲した，あるいはあらかじめ定められた二人の運命だと割り切るならばともかく，

(113) *La Suite du roman de Merlin*, éd. Gilles Roussineau, 2 tomes, Genève, Droz (TLF), 1996. 以下校訂者にならって『メルラン続編』*la Suite du Merlin*と略称する。

(114) *Ibid.*, Introduction, p. IX.

(115) *Ibid.*, pp. XXXIX－XL.

(116) *Ibid.*, p. XXIV; Fanni Bogdanow, *op. cit.*, pp. 180－183.

二人の出会いが読者に唐突な感を与えることは否めない。また以下に見るように『メルラン続編』では，メルランの最後は同時にニヴィエンヌによる危機に瀕したアーサー王の救出の時でもある。途中二人の物語が中断されることもないではないが，前書の『流布本続編』に比べれば，続編全体とはるかに緊密な関係を保っている。「物語的続編」la Suite romanesqueとも称されるのにふさわしい構成と言っていい。

ここではまたメルランの最後の運命は単なる説明としてではなく，メルランの語る三つの予兆の物語によって漸層的に語られて行く。自分の処女をうかがうメルランに対する少女の憎しみは，三つの出来事を知ることによって次第に具体的な形を取って来る。最後に少女はメルランによって教えられた石棺に彼を閉じ込める決心をする。この結末の違い，メルラン幽閉の有様の違いも少女のメルランに対する感情を反映していて興味深い。前書『流布本続編』においてはメルランの幽閉は空気の城へ閉じ込められる形を取るが，『メルラン続編』では石棺への幽閉となって暗い闇のイメージが付着する(117)。牧歌的で明るい雰囲気さえただよう空気の城への幽閉と暗い石室の中への幽閉との相違は，少女のメルランに対する態度に由来すると考えられる。二人ともメルランが悪魔の子であるとは知っていて恐れるが，ヴィヴィアーヌはメルランを独占する欲求につき動かされ，ニヴィエンヌはひたすらメルランを恐れ憎んで亡き者にする機会を絶えずうかがっている。あるいはこれには二人の年齢の違いが重なっているかもしれない。ヴィヴィアーヌは十二歳で無垢といってもいい年齢であり，『メルラン続編』でのニヴィエンヌは十五歳に設定されている。性的脅威をもっとも強くか少なくとも十分に感ずる年齢であろう。あるいは物語の内容にふさわしく作者がそのように年齢を設定したとも十分に考えられる。

今一つ気にかかる特徴がこれから読もうとする『メルラン続編』には存在する。前二書にあっては少女は言葉巧みに愛と引き換えにメルランから魔法の秘密を聞き出す。とりわけメルランの幽閉との関連では，人を眠らせる術，人を閉じ込める術

(117) 『ランスロ』にあってはすでに見た通り岩屋への幽閉であった。洞窟あるいは岩屋は，山の中腹にある洞穴に想定されるケルトの「シー」Sidhと呼ばれる山中他界を連想させるが，ここではこれ以上立ち入らない。シーについては次を参照。Jean MARKALE, *Le druidisme*, Paris, Payot, 1985, pp. 265 −272; Françoise LE ROUX et Christian-J. GUYONVARC'H, *Les druides*, Rennes, Ouest-France, 1986, pp. 280−299.

を少女はメルランから学ぶ。さらには股の付け根に書く呪文，魔法の枕などという小道具めいたものまで登場し，記述は即物的とさえ言える。それに対し『メルラン続編』では具体的な魔法の伝授の記載はない。後の物語の展開から見れば，この種の魔法を少女はメルランから学んだはずなのだが明示はされていない。代って強調されるのは，人の心を読む法，人に自分の心を悟られない法である。ニヴィエンヌは機会さえあればメルランを亡き者にしようとするが，メルランが事前にその計画に気付くのではないかという不安から逃れられない。しかし少女のかける魔法によってメルランは徐々に人の心を読む力を失い，自分の生死に関わることについては盲目となる。少女への愛のために，破滅に向うのを知りながら少女の言葉に唯々諾々と従うだけである。ここではあれこれの魔法よりもまず人の心が大事なのだ。

前置きがやや長すぎたが，以下に例によって『メルラン続編』のメルランとニヴィエンヌに関する部分の内容を略述する。

*

森に囲まれたカマロットでのアーサーとグニエーヴルの結婚式の翌日のことである。王とその臣下が食卓についていると，メルランが三つの不思議な出来事が起こると予言する。すると庭園に一頭の白鹿と一匹の白い猟犬が現われる。続いてそれを追う黒い猟犬の群れと猟犬に掛け声をかけて駆り立てる少女が躍り込む。「彼女はアーサー王の宮廷に来た女性の中でももっとも美しい者の一人である。とても短い緑色の服を着て，首には象牙の角笛をつるし，手には弓矢を持って狩人風の出で立ちをしていた」(118)。白鹿は宮廷に駆け入り，食卓を飛び越える。追ってきた白い猟犬が鹿の足にかみつき傷を負わせる。すると食事をしていたある騎士がやにわに白い猟犬を取りおさえ，馬に乗って逃げ去る。彼はこの目的のために宮廷に来ていたのである。その間にも白鹿とそれを追う黒い猟犬の群れは宮殿の反対側に走り去る。少女は弓矢を捨て，馬から下りて，逃がした白鹿と猟犬を自分に返すように王に訴える。食事が終るまで騎士は食卓を離れないというアーサー王の宮廷の習慣

(118) *La Suite du Merlin, op. cit.*, § 259.

をメルランはせき立てる少女に説明する。そこに白馬にまたがる武装した騎士が現われ，少女を力づくで馬に乗せ，あっという間に宮廷から去る。少女は王に助けを求める。メルランはかねて指名しておいた通りに，ゴーヴァンに白鹿と猟犬の群れを，トールTorに白い猟犬を奪った騎士を，ペリノールPellinorに少女を連れ去った騎士を探索するように命ずる。食卓が片づけられると，三人は武具をつけそれぞれの探索に向った。

あざやかな少女の登場である。少女の出で立ちはすでに狩りを好むディアヌの姿そのままで，説明がなくてもディアヌとの親近性は明らかである。ディアヌとの関係は身体的表現にまで達している。後に少女は「狩りの乙女」la Damoiselle Cacheresseとも呼ばれるであろう(119)。同時にこの冒険は騎士の叙任を受けたばかりのゴーヴァンとトールにとっては騎士に値する力を持つかどうかの試練の場であり，ペリノールもアーサー王の臣下となり円卓の騎士になったばかりである。この後三人の探索行が続くのであるが(120)，ここでは主題に直接関係する少女を追うペリノールの探索行だけに注目したい。

ペリノールは探索の途中で，泉のほとりに傷ついた騎士を抱えている女に出会う。女はペリノールに助力を求めるが，先を急ぐ彼は女と騎士を見捨てて行く。女はペリノールを呪う。深い傷のために死んだ騎士を見て女も剣で胸を突いて死ぬ。ペリノールがさらに先へ進むと，二人の騎士が戦っている。一方は少女を国元に連れ戻しに来た彼女の従兄である。ペリノールは戦いをやめさせ，少女を奪った騎士と戦って一撃のもとに打ち倒す。従兄の話から，少女は両親に長い間会っていないことが分る。また彼はこう付け加える。「彼女は王と王妃の娘で，とても高い家柄の娘です。森での狩りを好み，そこに楽しみを得ているので，恋人も夫も持つことを望まず，そういった話をする者をさげすみます」(121)。

登場の場面での振る舞いと服装から想像された少女のディアヌ的性格は従兄の話からますますはっきりする。彼女は男を受け入れず，自分の処女を守る。

---

(119) Cf. *ibid.*, § 313, 3, § 315, 10, § 417, 38, § 440, 30.

(120) ゴーヴァンの探索（*ibid.*, §§ 264－281），トールの探索（*ibid.*, §§ 282－294），ペリノールの探索（*ibid.*, §§ 295－306）。

(121) *Ibid.*, § 297.

宮廷への帰り道，ペリノールと少女は深い谷間の難所にかかり，少女は足をすべらした馬から落ち腕をくじく。やむをえず少女を木陰で休ませ寝かせるが，思わず寝過して夜も大部更けてしまう。二人に気付かずたまたま行き合った二人の騎士の会話から，アーサー王毒殺の企みを知る。少女は偶然に立ち聞きしたこの計画を急いでアーサー王に報せなくてはと思うが，ペリノールは宮廷にはメルランがいるから心配には及ばないと言う。「何ですって，賢者メルランが宮廷にいるのですか。それでは王がこの裏切りを恐れる必要などありません。人がどこで何をしようと，メルランはすべて見通しています。だから私たちが宮廷を目の前にする頃には，裏切り者は討たれていることでしょう」(122)と少女は言い，二人は安心してその夜は野原に野宿し，翌朝出立する。

ペリノールの話からはからずも少女はメルランの存在を知る。しかも彼女はメルランの名声，居ながらにして人の心を見通す全知を知っていた。

二人はペリノールが見捨てた女の所を通る。女の死体はけものに食い尽されて，頭しか残っていない。ペリノールは後悔する。女の死体を見て泣くペリノールに対して，少女は「何をしているのですか。あなたほど勇気のない人間は見たこともありません。若い娘の死のために涙を見せるなどとは」(123)と言ってなじる。この言葉にも少女のディアヌに通じる獰猛で冷酷な性格の一面が表わされているようである。

宮廷に帰還したペリノールは皆に歓迎される。すべてをアーサー王とその臣下に報告する。見殺しにした女については，王からも非難される。メルランはペリノールの未来について予言する。また下賤な生れと思われていたトールの真の父親をメルランは教える。

まずトールの母親である羊飼いの女が宮廷に呼び出される。母親だけが知っているはずの真実を言うようにとメルランに促されて，母親は相手の名を聞き返す。「私はメルランという者だ。私を見れば見るほど，あなたは私がますます分らなくなる」「確かにそうでしょうとも，様々な形と方法で姿を現わす力を持つのですから，彼がだませないような賢い人はこの世にいません。多くの人の言うようにあな

(122) *Ibid.*, § 301.
(123) *Ibid.*, § 303.

たが悪魔の子なら，あなたに会った時に誰と分らなかったのも不思議ではないでしょう」(124)。機知に富んだ羊飼いの女の言い分が真実だとメルランも認めざるをえない。母親の言によると，トールは結婚の直前にある騎士に無理矢理犯されて生んだ子である。メルランはその騎士はペリノールであると言う。父と子は相抱く。

アーサー王は狩りの乙女に白鹿の頭と猟犬を返し，彼女を宮廷に引き留める。メルランはこの少女が尊敬に値し賢いこと，王と王妃の娘であることを明かす。とするとメルランは少女の素性も少女が宮廷に現われることもあらかじめ知っていたのであろうか。いずれにせよ王妃がたずねると，少女は名をニヴィエンヌと言い，ブルターニュの高貴な人間の娘だと答える。「ロベール・ド・ボロン殿の物語を聞いた者は誰でも知っているが，やがてこの少女は湖水の貴婦人と呼ばれ，長い間自分の館で湖水のランスロを育てる者だ」(125)という作者の注釈が入る。

ある日メルランはアーサー王にさまざまな秘密をもらすが，すべては語らない。決して言われた事は他言しないと誓うアーサー王にメルランは答える。「私があなたの側にいる限りは他言しないでしょう。しかし私が去り，もう私に会えなくなると，あなたはいかに大事なものを失ったかを悟ることになります。あなたはすぐにも私を忘れるでしょうが，しかしその後で私がいるならば王国の半分を与えてもよいと思うでしょう」(126)。少女の出現を機にしたものかどうか，メルランは王の元にいる時間も長くはないことを知りはじめた。

さてメルランは喜んでニヴィエンヌの元でしばしば時を過した。彼女は美しく十五歳になるやならずである。「彼女は歳の割りには大変賢かったので，メルランが自分を愛していることに気付いた。そしてそのことにおびえた。メルランが魔法をもって自分を汚すのではないか，眠っている間に自分と交わるのではないかと怖れた」(127)。メルランには相手の意に反する行為をするつもりはなかったが，処女を奪われるのではないかというニヴィエンヌの強迫観念は次第に強まって行く。こうして彼女はアーサー王の宮廷に四か月とどまった。メルランは恋人に会うかのよう

(124) *Ibid.*, § 309.
(125) *Ibid.*, § 313.
(126) *Ibid.*, § 314.
(127) *Ibid.*, § 315.

に毎日彼女に会いに来る。メルランが自分に夢中になっているのを知ると，「知っている限りの魔法を私の求めるままに教えると約束しなければ，決してあなたを愛することはありません」(128)と少女は言う。今や少女は自分の見せかけの愛と引き換えにメルランの魔法を学ぶことを決意する。また魔法であれ何であれ自分を苦しめることはさせないとメルランに約束させる。メルランは彼女に魔法と魔術を教え，彼女はその多くを学んだ。

そこにブルターニュに境を接するノーサンバーランド王国(129)の王からアーサー王に書状が届く。書状は娘のニヴィエンヌを国に帰すようにという依頼であった。少女の意に反してメルランは帰国の旅に同行を申し出る。彼女は心悩む。「彼ほど憎んでいる者はなかったからである。しかしそんな様子はおくびにも出さず，うれしそうににこやかな顔をして，彼が申し出たこの同行を大変感謝した」(130)。

翌朝少女はカマロットを立った。メルランも宮廷の誰にも別れを告げずに行を共にする。船に乗りブルターニュに着くと，クローダスと戦うバン王の領地を一行は進む。その日はバン王の居城の一つトレーブで泊まる。城には王妃エレーヌと一人息子のランスロもいて，彼はまだ一歳にも満たない赤子である。ノーサンバーランドの姫を王妃は歓迎する。メルランと少女はこもごもランスロの輝かしい将来を予告する。少女はランスロに百回以上も口づけをする。未来の湖水の貴婦人ニヴィエンヌとランスロの初めての出会いである。ランスロを湖に連れ去りそこで育てることになる機縁が巧みにここで与えられている。

次の日の朝一行は出立すると，「谷間の森」le Bois en Valという名の小さな美しい森にさしかかった。メルランは森にある「ディアヌの湖」le Lac Dyaneに少女を誘う。一生の間ディアヌは森の楽しみを愛していたから，ディアヌに関するすべてを少女は愛していた。湖のかたわらには大理石の墓があり，メルランの話ではディ

---

(128) *Ibid.*, § 316.

(129) Norhomberlande, un roiame qui marcissoit a la Petite Bretagne (*ibid.*, § 317).さらに後には，「この物語を聞いている方々が，今話しているこのノーサンバーランドがローグル王国とゴールGorre王国の間にあった王国と思いませぬように。このノーサンバーランドはブルターニュにあり，他のはブリテンにあるのだから，そう考えるのはおろかなことです」(*ibid.*, § 321) と作者はわざわざ注している。

(130) *Ibid.*, § 319.

アヌの愛人であったフォーニュスFaunusが眠っている。

ディアヌがこの近くでひたすら狩りを事としていた時，この国の王の息子フォーニュスが見染めて求愛する。彼は父母も捨て，彼女だけのものとなる。ディアヌは彼のために湖のほとりに城を建てる。こうして二年の歳月が流れた時，ディアヌは美しい青年フェリクスFelixを見て夢中になる。フェリクスは，フォーニュスがディアヌの愛人であることを知っており，事が露顕したら殺されるだろうと思う。フォーニュスがいる限りディアヌと一緒になることはないと言う。ディアヌはフェリクスへの執着のためにフォーニュスを亡き者にしようと決心する。この墓は元々，悪魔のデモフォンDémophonが魔法によって傷をいやす水をたたえさせたものであった。たまたまフォーニュスがけものに傷つけられた時，ディアヌはあらかじめ水を抜いて空にし，薬草を入れるといつわってフォーニュスをそこに横たえさせる。横たわるフォーニュスの上に蓋石を置き，ディアヌは薬草の代りに煮えたぎる鉛を注ぎ込む(131)。フェリクスに事の次第を告げると，彼はあまりの残酷さに恐れをなし，剣を抜いてディアヌの首をはね死体を湖に投げ込む。こうしてこの湖は「ディアヌの湖」と呼ばれるようになる。

ニヴィエンヌはかつてディアヌの館のあった所に新たに城を建てるようメルランに頼む。少女は父母の元には帰らず従者とこの城に住むであろう。メルランはあらゆる国から石工と大工を集め城を建てる。城には魔法をかけて，ここに住む人以外には誰にも見えない。どんなに近づいても見えるのは湖の水だけである。

この湖は，『ランスロ』において乙女が「ランスロをさらい，彼を抱いて飛び込んだ湖」(*Lancelot, op. cit.*, VIa, 12) を巧みに焼き直したものである。『ランスロ』においてはこの湖に誰が魔法をかけ，そこにある館を誰が建てたとも明示されていなかったが，ここではメルランが作って魔法をかけたと物語に即して語られている。

メルランはこの城に少女と共に過した。彼女をあまりに愛していたので，彼女が彼に身を捧げることなどは求めなかった。とはいえ，何とかそうならないものか，

---

(131) Faunusという名は，同名のローマ神話の半獣神から取ったものにちがいない。半獣神はその属性からして野性人に等しく，野性人はメルランの本質的な一面である (Francis Dubost, *op. cit.*, p. 746)。ディアヌが愛人フォーニュスを石の中で殺したように，ニヴィエンヌはメルランを石の下に閉じ込めるであろう。

完全に自分の思いを遂げることはできないものかと考えていた。「しかし彼女は世の中の誰よりもメルランを死ぬほど憎んでいた。彼が彼女の処女を望んでいることをよく知っていたから。毒薬であれ何であれ，彼を殺す企みを実行できるなら，大胆にそうしたであろう。しかしそれはできなかった。彼は他の誰よりも賢明であったから，彼が気が付くのを恐れたのである」(132)。しかし彼女はすでに彼から教わった魔法で彼に魔法をかけていたので，彼がそれとは気付かずに望む方に言葉巧みに彼を誘導することができた。

少女はメルランの真の目的を知っていて，彼の死を何よりも望んだ。しかし彼の殺害の企みを実行に移すことはできない。殺害の方法に迷っているわけではない。ひとえにこの企みをメルランが少女の心の内に読むのを恐れているのだ。事前に察知されるならば身の破滅も招きかねないであろう。少女は自らの心にヴェールをかけてメルランの予知の能力を徐々に弱めて行く。

ある日少女は危機に向うアーサー王の話をメルランに聞かされる。王を危難にさらしておくのはよくない，宮廷に常にいて国を離れない方がよいのではないかとメルランに問う。彼は二つの理由からブリテンの宮廷にはいられない。一つは少女を愛していて彼女から離れられないからである。もう一つは宮廷に行くや否や毒薬か他のもので殺される運命にあるからである。彼は魔法にかけられていて誰が殺害を企んでいるかは分らない。外のことはともかく，彼はもはや自分の生死に関わることについては分らないし，魔法を解くこともできない。メルランのこの言葉を聞いて少女は大変喜ぶ。メルランの死ほど彼女の望むものはないのだ。ましてや彼は少女が何をするか，何を言うかはもはや分らないのだ。

またある日，アーサー王が決闘で倒される危険があるとメルランは少女に話す。王の妹モルガンMorgainが王の所持する剣エスカリボールEscaliborを手に入れ偽物とすり替えているからだ。少女は海を渡ってブリテンの王の元に行き，王を救わなくてはと言う。「裏切りによって私が死ぬことを恐れるのでなければ，ブリテンに行くことほど私が望むことはない」(133)とメルランは答える。この世の誰よりもあ

---

(132) *Ibid.*, § 329.

(133) *Ibid.*, § 332.

なたを愛している，私を守ると同様にあなたを守りますからと少女に促されて，メルランは「愚かな行いをすることになるとは思うが，あなたが望むなら行きましょう」[134]と答えざるをえない。

一行は出立した。中に少女の従兄の二人の騎士もいた。彼らは少女が誰よりもメルランを憎んでいることを知っている。海を渡ると，ローグル王国への近道である「危難の森」la Foreste perilleuse[135]の方向へメルランの指示するままに道を取った。

とある城に宿泊して翌朝一行が馬を進めて行くと，ニレの木の下にある玉座に座る二人の魔術師に出くわす。二人が手に持つ竪琴を弾き[136]，通りかかる騎士と婦人がそれを聴くと四肢の力を失い身動きができなくなる。魔術師は騎士を殺し，婦人をなぐさみものにする。メルランが耳に栓をして二人に近づき逆に悪魔祓いをすると，二人の魔術師は金縛りに会い，ただ座ってメルランを見つめるだけである。メルランは二つの大きな墓穴を掘らせ，二人を投げ入れ，大量の硫黄に火を付けて穴に投げ込んで殺す。この業火はアーサー王の支配が続く限り燃え続けるであろうとメルランは予言する。「近い内に死ぬことを私は知っている。このためにこのような不思議を行うのである。私の死後これが私の広大な知恵の証人とも記念ともなることを望む」[137]とメルランは言う。一行は危難の森に向う。

メルランの死後も燃え続けるこの業火は，死を前にしたメルランの最後の事績であるとともに，婦人をなぐさみものにする二人の魔術師の性の逸脱に対する罰でもあろう[138]。二人の魔術師の最後はメルランのその後の予兆ともなっている。あるいはこの事件は少女のメルラン殺害の決意をますます強固にする契機となったかもしれない。

この間アーサー王の王国に侵入した五人の王との戦いが続く[139]。この戦いは若

---

(134) *Ibid.*

(135) *Ibid.*, § 333.

(136) 音楽の魔術については次を参照。Christian-J. GUYONVARC'H, *Magie, médecine et devination chez les Celtes*, Paris, Payot, 1997, pp. 336－340.

(137) *La Suite du Merlin, op. cit.*, § 340.

(138) Laurence HARF-LANCNER, *op. cit.*, p. 298.

(139) *La Suite du Merlin, op. cit.*, §§ 341－378.

いゴーヴァン，クーKeu以下の騎士たちに戦功を上げさせる機会を与えるために設定されたかのようである。戦いの最中に戦死した八人の円卓の騎士に代えて，アーサー王はペリノール，ゴーヴァン，クー等を新たに円卓の騎士に選抜する。かねてアーサー王を憎む妹のモルガンは，ある国の二人の兄弟の領地争いを利用し魔術の力をも借り，王を亡き者にして愛人のアカロンAccalonを王座につける壮大な企みを巡らす。偽物のエスカリボールを用いて，それとは知らずに王はアカロンと決闘する危機に立たせられる。その頃，「さて物語の語るところによれば，すでにわれらの書で述べているようにメルランは殺した魔術師の元を立ち去り，日のある内は一行と共に馬で進んだ」(140)。

メルランの少女への愛，少女のメルランへの憎しみが繰り返される。「メルランは死ぬほど湖水の貴婦人に恋い焦れていたが，彼女がまだ処女であることを知っていたために，彼女が彼に対して身を捧げることまでは求めようとはしなかった」(141)。ただし心の内では彼女から進んでそうしてくれるよう望んでいたのも事実である。一方少女はといえば，「彼が自分の処女以外には何も望んでいないことをよく知っており，彼を死ぬほど憎み力の限り彼の死を求めていた」(142)。彼は魔法の術にはまっており，彼女のすることは何も知ることはできない。彼女は行を共にする従兄の騎士に，機会さえあれば彼を殺すとすでに打ち明けていた。もはや彼女は待ち切れない。あらゆる富をもってしても，「彼を愛する気にはなれない。彼が悪魔の子であり，他の人間とは違っていることを知っているのだから」(143)と従兄に語る。

少女がメルランを憎むのは彼が彼女の処女を望むからであるが，その先には彼が悪魔の子であるという認識がある。異類の子はそれと分れば遠ざけねばならないのである。

一行はある日危難の森を通った。ここで夜となり皆は野営することになる。メルランはこの近くにあるすばらしい部屋，「その扉は頑丈な鉄製で中に入った人間は

---

(140) *Ibid.*, § 379.

(141) *Ibid.*

(142) *Ibid.*

(143) *Ibid.*

決して出ることのできない」(144)部屋について話す。百年ほど前に，この地方を支配する王の息子にアナスタンAnastenという者がいた。彼は貧しい娘を心から愛している。父王に強く反対されると，アナスタンは人に知られぬ岩山に部屋をくり抜き，そこに恋人を迎える。二人の恋人は一生幸福にそこで暮し，同じ日に死ぬ。一緒にいた部屋に二人の遺体は葬られた。

少女はこの話を聞くと，これこそメルランを閉じ込める場所だと考え大変喜ぶ。是非ともその部屋が見たいと言う。二人は伴を連れ松明を持って岩山に向った。鉄の扉を開いて入った部屋は金のモザイク模様の壮麗なものであった。さらに中に進み第二の鉄の扉を開けると，そこがかつての二人の寝室で遺体の置かれた所である。部屋の奥には美麗な石棺がある。少女に頼まれてメルランは十人かかっても持ち上げられない墓石を魔法ではずした。二人の愛の形見に少女は今夜はここで休むと言う。部屋に寝台をしつらえさせ少女は寝る。メルランはその隣りの寝台に寝るが，「彼が横になるや否や，すっかり魔法にかけられたごとく眠ってしまう。以前所有していた知恵も記憶もすべて失ってしまった」(145)。それをよく知っている少女は寝台から立ち上り，さらに魔法を強力なものにした。少女は扉を開けて伴の者を呼び入れる。「他人に魔法をかけてきた者がすっかり魔法にかけられている」(146)と皆に言い，さらに続ける。「さてどうすべきか言ってみなさい。彼は私の名誉のためではなく，私をはずかしめ処女を奪うために私について来ました。彼がこうして私に交わるくらいなら，いっそ彼が首をくくられる方を私は望みます。彼は悪魔の子なのですから。悪魔の子を愛するなどは私にはとてもできません」(147)と少女は皆に訴える。これほどの好機は二度とないから，ただちに殺しましょうとお伴の若者は言うが，さすがに目の前で殺されるのを見るにしのびず，少女はメルランの身体を石棺の中に入れさせてふたをする。彼女は呪文を唱え，墓の上の石を魔法で閉じてしまう。もはや湖水の貴婦人自身でなければ誰も墓を開けることはできず，メルランを見ることもない。

---

(144) *Ibid.*, § 380.
(145) *Ibid.*, § 385.
(146) *Ibid.*
(147) *Ibid.*

四日後に来合わせたボードマギュBaudemaguを除いて，その後メルランの声を聞く者もなかった[148]。

翌朝少女の一行は出発し，アーサー王が決闘するはずの場に急いだ。

この間にもモルガンによって決闘を強いられたアーサー王はよく戦うが，本物のエスカリボールと魔法の鞘を持つ相手は少しも傷つかない。「もし湖水の貴婦人が，メルランがその場にいないと分って，王を助けに来なければ」[149]，王は殺されるところであった。アカロンが振り上げた剣を下ろす寸前に彼女が魔法をかけたので，剣は彼の手から落ちる。素早く剣と鞘をアーサー王は奪う。剣と魔法の鞘を失ったアカロンは全身から血を噴き出して倒れる。

少女はもはやメルランに取って替った[150]。王を守るのは今やメルランではなく湖水の貴婦人である。彼女の力は後にモルガンも認めるところである。モルガンは自分を追うアーサー王を殺したいと思う。「しかし私にはそれができない。この国にちかごろ来た女が私を恐れて彼の身を護っているので，彼女がこの地にとどまる限りどのような魔法も彼を害することはできない」[151]と嘆く。あるいは「彼女は今この世にいる誰よりも魔法と魔術を知っている。彼女が生きながら地に埋めたあ

---

(148) ただしその直前に「トリスタンの真正の物語が語るように，トリスタンの願いにより彼女が来るまでは……」誰も彼を見ないという奇妙な挿入がある（§386, ll. 7－9）。しかし『散文トリスタン』にはこのエピソードは見い出せない（note au §386, l. 8）。中世スペイン語の翻訳での記述については，F. Bogdanow, *op. cit.*, pp. 52－54を参照。また一写本によれば，メルランの幽閉は一時的なもので，聖杯の英雄によって解放される可能性もあった（Elspeth Kennedy,《The Scribe as Editor》, dans *Mélanges de langue et de littérature du M. A. et de la Renaissance offerts à Jean Frappier*, Genève, Droz, 1970, pp. 528－529; Richard Trachsler, *op. cit.*, pp. 88－89, 92）。さらに民間伝承，その他のジャンルにおけるメルラン幽閉の様々なヴァリアントについては，P. Zumthor, *op. cit.*, pp. 254－260を参照。

(149) *La Suite du Merlin, op. cit.*, §398. 少女の多少のためらいは，彼女がメルランの幽閉に確信を持っていたわけではないことを表わす（note au §398, l. 9）。

(150) メルランに取って替った少女は，『メルラン伝』でのメルランの妹ガニエダを思わせる。森に隠棲するメルランの元に身を寄せたガニエダは年老いて霊の威力を失ったメルランに替って王国の未来を予言する。メルランは予言の使命が妹に移ったことを認め，妹をはげます（Geoffroi De Monmouth, Vita Merlini, éd. Edomond Faral, *op. cit.*, tome III, vv. 1469－1470, 1518－1524）。

(151) *La Suite du Merlin, op. cit.*, §414.

の予言者の王が彼女に教えたのだから」[152]とニヴィエンヌの優越を告白する。

ここで『流布本続編』におけると同様，メルランの探索に向う後日談が語られる。

「乙女の岩」la Roche aux Pucellesに魔法をかけられて囚われているゴーヴァンとル・モロルトLe Morholtを救出するために，アーサー王はメルランを召し出すことにする。彼が宮廷に出仕しなくなってから長い間がたち，生きているか死んでいるかも分らないのであるが。メルランを連れて来た者にはほうびを出すとのことで，多くの人々が探索に向うが，メルランの真実は湖水の貴婦人とボードマギュ以外は知らない。

探索に旅立ったトールとアグランAglantはある日黒づくめの騎士（実はボードマギュ）に出会い，試合を挑まれて敗れる。彼はメルランについての消息を教えようと言う。「メルランはかつて宮廷で言った通りに死んだ。〈私は生きながら地に埋められるだろう〉[153]と。メルランの最後の言葉は，ガエリエGaherietを騎士にすれば，ゴーヴァンとル・モロルトを乙女の岩から救い出せるであろう」[154]というものであった。トールとアグランの二人はアーサー王の宮廷に帰り，事の次第を報告する。

この後もはやメルランは回想の中でしか語られることはないであろう。

---

(152) *Ibid.*, § 417. モルガンもやはりメルランの女弟子であった。かつてモルガンはメルランの魔法の力を知り，彼に近づいた。メルランの望むすべてのことを彼のためにするという約束で，彼女は彼の知るところのものを教えてくれるよう懇願した。メルランは彼女の大変な美しさを見てはげしく彼女を愛したので，わずかの間に彼女の望む多くのことを教えた。やがてモルガンはメルランの狂おしい愛に気付き，身辺から彼を遠ざける（*ibid.*, § 157）。

(153) すでに本書の冒頭近くでメルランはアーサー王に次のように予言していた。「……あなたは名誉をもって，私は恥のうちに死ぬでしょう。あなたは壮麗に埋葬され，私は生きながら地中に埋められ恥ずべき死となります」（*ibid.*, § 42）。しかも神以外にはこの死をさまたげることはできない。

(154) *Ibid.*, § 526.